

* 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

* 句読点・記号も字数に数えます。

* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

六年一組の卒業パーティに向けて「ぼく」(渚ワタル)、ジーエム(佐藤和義)、ザッキー(岡崎)ら男子一同で映画を撮ることにした。放課後の校舎に閉じこめられた小学生たちが謎の怪人『仮面のピーターパン』に次々と消される、というホラー・サスペンスだったのだが、仲間が現実に『仮面のピーターパン』を次々と目撃していく。さらに、教務主任で厳しい江島先生が目撃したことから映画撮影が禁止されてしまった。次の場面は「ぼく」の夢である。

いつの間にかぼくは幼稚園のころの姿で、隣には父さんがいた。ぼくの背は父さんの腰くらいまでしかなくて、上のほうにある父さんの顔はよく見えなかった。だけど、「A」つないだ骨ばった手の、少し冷たい感触は、間違いなく父さんのものだった。

父さんと手をつないで、ぼくは歩いていく。少しだけ春に近い風の暖かさも、足の裏に当たるアスファルトの硬さも、「B」感じることでできた。そしてぼくは①ミチバタに②ウえてある、まだ花の咲かない菜の花の一本に③それを見つけて足を止める。三日月にも④二た形をした、濃い緑色の物体。

「ああ、これは蝶のサナギだね。テレビや本で見たことはないかい？」父さんは懐かしい、そよ風のようなささやき声で言った。

「サナギ？」とぼくはきき返す。ぼくの意味とは関係なく、④カッテに声が出ていた。父さんは、そう、とうなずいて、

「サナギというのはね、蝶が幼虫からあのきれいな羽根で飛ぶ大人の蝶になるための、準備をする姿なんだ。サナギの間は、蝶は硬い殻の中に閉じこもってじっとしているんだよ。普通は何週間かで殻から出てきて蝶になるんだけど、冬の間は何か月もサナギのまま動かないこともある」

ふうん、とぼくは①生返事をして、目の前のサナギに触れようとする。すると後ろから父さんの手が伸びてきて、ぼくの小さな手をやさしく包みこんだ。

「サナギに触ってはいけないよ。びっくりさせて、起こしてしまうからね」
「サナギは眠ってるの？ ずっと、一人ぼっちで？ そんなのつまらないよ」

ぼくの言葉に、父さんはゆるゆると首を振って、
「ワタルは、②サナギの見る夢を知っているかい？」

と言った。ぼくは父さんの顔を見上げた。父さんは続ける、
「サナギはね、夢を見てるんだよ。それはとても不思議な夢で、サナギたちはみんな、同じ夢を見るんだ。だからサナギは、幼虫のころに仲の良かった友だちと、夢の中で会うことができるんだよ。それにその夢の中にはね、サナギたちの楽園があつて、そこでサナギは、仲間たちといっしょに、毎日楽しく暮らしているのさ」

だから、サナギは【C】退屈じやないし、寂しくもないんだ。と、父さんは言った。

そこでぼくは、こらえきれなくなつて叫んだ、
「でもっ、それなら！」

ぼくの声は現在のもので変わっていた。気がつけば③声だけでなく姿までもがもとに戻っていた。ぼくの背は父さんの首のあたりまでであつた。
「④それなら……」

その先を口にしようとして、ぼくは思いとどまった。口にするのが怖かつた。

そうだ、たとえ口に出したところで、父さんに尋ねてみたところで、なんの意味もない。ぼくの願いがかなうことは、決してない。

ぼくはうつむいて、黙っていた。
そんなぼくの頭に、父さんはやさしく手を載せて、「D」ぼくの髪をなでた。それから、まるでぼくの気持ちなんて全部お見通しのような、父さんの、静かな声が聞こえた、
「そうだね。けど——」(中略)

「ぼく」は学校をしばらく休んでいるジーエムに撮影禁止になったと電話した。その夜、ジーエムが行方不明になったという連絡を受け、「ぼく」はザッキーとともにジーエムを探し、学校にたどりつく。

初めて見る夜の屋上の風景。その中心に、仮面の怪人はいた。
ア 乱れた⑤コキユウに邪魔をされて、ぼくが言葉を発することができないうちに、相手のほうが話しかけてきた。芝居がかつたしぐさで両腕を広げ、仮面の下から聞きなれた⑥ケイカイな口調で語るその声は、間違いなくジーエムのものだった。

「これはこれは渚くん、よくそこまでたどり着いたね。そう、このぼくこそが仮面のピーターパンの正体さ」
しだいにコキユウが落ち着いてきた。今さっきのジーエムの言葉の意味も理解できないまま、ぼくは荒い息とともに問いかけた、
「こんなところで、なにしてるんだよ。そんな格好で」
「ふうむ、ぼくとしてはきみがどうやって校舎内に侵入したのかのほうに気になるのがね。ああ岡崎くんがいつしよだったということはぼくと同じ抜けみちを使ったのか。いやいやまったく、この学校の防犯体制のずさんさといったら実に噴飯(くははん)!! おかしくて笑ってしまうものだね」
ジーエムは②露骨に話をそらした。いつもと変わらない口調。受験が終わって以降、二人で帰ったことはなかったから、ジーエムの声を聞くのは本当に久しぶりだった。その声を聞いたとたん、さんざん心配させたことを⑤責める気持ちも怒る気持ちも、どこかへ消えてなくなつてしまった。

「もういいから、いい加減その仮面外したら。なんか話しくいんだけど」
ぼくの質問とは無関係な話を早口で続けるジーエムに、ぼくは苦笑して言った。するとジーエムはふうむと考えこむしぐさをして、
「いや、⑥申し訳ないがそれはお断りしよう。妙な誤解を受けそうだからね」

「誤解? どういう意味さ」
「だからね、ぼくは③不覚にも、ついさっきまでここで熟睡していたんだよ。今数分前に目が覚めたばかりなんだ。ゆえにだね」

ジーエムがなにを必死になっているのかわからなかった。ぼくが首をかしている、ジーエムはあきらめたようにため息をついて仮面を脱いだ。仮面の下に現れるジーエムの不機嫌そうな表情。その目が、泣きはらしたあとみたいに真っ赤になっていた。

ぼくは息をのみこんだ。ジーエムが怒つたように言った、
「渚くん、再度言うておくが目が赤いのは寝起きのせいだ。断じてきみが今現在妄想(もうそう)しているような理由ではない」

それを聞いて、ぼくは思う。ジーエムは、意外とこういう嘘が下手だ。胸が詰まるという言葉は、きっと今のぼくのような気持ちを言うんだろう。ぼくはジーエムに言った、
「——ありがとう、ジーエム」

「なんだい突然礼を言ったりして。調子が狂うじゃないか」
相変わらず不機嫌な声で、ジーエムは言った。ぼくはそれ以上、ジーエムの赤い目についてはなにも尋ねないことにした。

ぼくは言った、
「それで、さっきの話、ぼくこそが仮面のピーターパンの正体だ、つて……」

「うん? つまり言葉どおりの意味さ。夜な夜な怪人の扮装(ふさう)で皆の前に現れては謎を振りまいていたのはこのぼくだよ。どうだい、なかなか刺激的だったろう?」

ぼくは、とっさに言葉が返せなかった。だって、ジーエムはそんな子供じみた悪戯(いたづら)の犯人像とは、⑦一番遠いところにいたから。
「ジーエムが仮面の怪人って、じゃあ、あの教室の様子が新学期のころに戻っていたのもジーエムがやったわけ?」

「そう、あれは絶望的な気持ちになったね。⑦ヒトパンかけてなんとか作業を終えたというのに、誰もあの事件を仮面のピーターパンと結び付けてくれないのだから」

「昨日の夜に、江島先生が校舎内で見かけたのも?」
「ああ、それは違う。それは本物のほうさ」
「本物?」

さりとて言うジーエムに、ぼくは驚いてきき返す。
「そう、本物の仮面のピーターパンさ。ぼくは受験で撮影を抜けて以来、この衣装を着るのは今夜が初めてだよ」

(二枚目につづく)

しかしそう言うジーエムの表情は薄ら笑いのままで、本物の怪人が現れたなんて非現実的な話を、本気で言っているようにはとも思えなかった。「じゃあ、ぼくが見た怪人も——」

「なんだ、きみも見ていたのかね？ それも本物だよ。ぼくがわざわざ正体を見破れそうな相手のところに姿を現すと思うのかい。しかしまったく、きみのところに現れて、ぼくの前には姿を見せないとは」

どうにもうまくいかないものだね、とジーエムは言った。

冗談めいたかるい口調の中で、その言葉には別の響きがあった。それを聞いて、ぼくはジーエムがどうしてそんなことをしたのか、なんとなくわかってきた。ジーエムはたぶん、みんなを怖がらせようとか、小学校生活の最後に、小説みたいな魅力的な事件を起こしてみんなの記憶に残そうとか、そういう理由で怪人のまねを始めたんじゃない。

ぼくはいつかのジーエムの言葉を思い出して言った、

「ジーエム、前に言ったよね。みんなが信じてたり願ったりすれば、本物の仮面のピーターパンが現れるつて。あれは、冗談じゃなかったんだね」

ジーエムは答えなかった。ぼくも黙ってジーエムを見つめた。二人きりの屋上には、風の音しか聞こえなくなつた。

きつと、ジーエムもぼくと同じ気持ちだったんだと思う。中学に進学して、みんなと離ればなれになるのが嫌で、それで仮面のピーターパンに会いたかつたんだらう。だから怪人の格好でみんなの前に現れて、みんなに怪人は実在すると思わせようとした。そうすることで、都市伝説の怪人が現実姿を現すと、ジーエムはそう信じたのだ。

ジーエムはやがて大きなため息をつく、「やれやれ、すべてお見通しというわけかい」と苦笑した。

「ジーエム……」

「べつに、そんなことを本気で信じていたわけではないよ。今だって、こんな格好をしたところでなんの意味もないことは理解している。ただそれでもね、どうにもならないことをどうにかしたくて、なにかをせすにはいられなくて、結局なんともくだらないことを始めてしまったというわけさ」

ジーエムは、⁸ ぼくに背を向けて続ける、

「渚くん、これはぼくのひとり言だから聞き流してほしいのだがね。最初に出会ったときから、ぼくはきみや岡崎くんと過ごす時間を本当に大切に思ってきたんだよ。ぼくはこんな人間だからね、きみたちと会うまではずっと一人だったし、卒業してきみたちと別れば、また一人になる。だから、ぼくはきみたち二人と、それからうちのクラスの面々との楽しい日々が、ずっと続けばいいのにと、いつまでもこのまま変わらなければいいのにと、柄にもなく思ってしまったんだよ」

ぼくはジーエムに言葉をかけることができなかった。いつまでもこのまま変わらなければいいのに。ジーエムの言葉は、ぼくの言葉だった。

ジーエムはこちらに背中を向けたまま、ふう、と寂しげに息を吐いた。

「だが、すべてしかたがないことさ。残念ながらね」

ジーエムにかける言葉が見つからず、ぼくは黙りこんだ。

そのとき、屋上を強い風が吹き抜けた。ジーエムが身にまとった怪人のマントがぶわっ、と舞い上がり、鮮やかなピンク色の裏地がぼくの瞳に映った。その瞬間、ぼくの ⁹ 脳裏に夢の中での 父さんとのやり取りがよみがえってきた。

¹⁰ 父さんは、ぼくの髪をそつとでながら言った、

「そうだね、けど——」

父さんはもう片方の手で、足元の花壇を指差す。¹¹ まだつぼみの菜の花の花壇。その花壇に向かって、父さんはオーケストラの指揮者みたいに、くるりと手を振るう。それが、魔法の合図だった。

ぼくの視線の先で、菜の花のつぼみがみるみるふくらみ、次々にまぶしい黄色の花が咲き始めた。ぼくは驚いて父さんを振り返った。父さんは再び花壇を指差す。ぼくが視線を戻すと、菜の花の茎や葉のところどころに、小さな緑色の光が灯っていた。よく見れば、その光はすべて蝶のサナギだった。深緑色のサナギが光を放ち、その背中がいつせいに割れたかと思うと、中から色とりどりの蝶が姿を現し、われ先にとばかりに空へと舞い上がった。

ぼくは声をなくしてその光景を眺めていた。蝶たちは仲間と遊ぶよう

に、かるやかに、ぼくの鼻先を飛び交っている。¹ を澄ませば蝶の笑い声が聞こえるようだった。

「¹² なにもかもが、変わってしまうわけではないよ」

隣でふいに、父さんのささやき声が聞こえた。ぼくは父さんの顔を見上げた。

「¹³ サナギから蝶になれば、姿かたちは全然違うものになってしまうけど、サナギのときの気持ちが消えてしまうわけじゃない。だからこの蝶たちは、たとえ仲間と離ればなれになってしまつても、いつかまた別の場所でお会つたときには、昔のように心を通わせることができる」

ぼくはもう一度、蝶たちのほうを向いた。さつきまで一つの場所に固まっていた蝶は、しだいに別々の方向へ飛んでいこうとしていた。

「春が来れば、時間が過ぎれば、いろいろなものが変わっていく。でもね、変わらないものもあるんだよ。変わらずに残しておきたいと強く願う気持ちがあれば、想いや絆はきつと変わらずにそこにあり続けるんだ。それにね」

父さんが言葉を切るのと同時に、春の訪れを告げる強い風が吹いた。風の中で父さんはぼくに向かって、ふわりと微笑んでみせた。——そう

だ、そう。父さんはこんなふうに、静かに笑う人だった。

春風に乗って、薄紅色の花びらが降ってきた。ぼくは頭上をあおぎ、そして ² を丸くした。

そこに、鮮やかなピンク色の ¹⁴ 天井があった。桜だった。青空を隠してしまふほどの満開の桜が、ぼくと父さんを見下ろしていた。舞い落ちる桜の花びらに交じって、さっきの蝶たちがひらひらとぼくの視線の先を横切っていた。

最後に父さんの楽しげなささやき声が聞こえた。

「それにね、ずっとサナギのままでもいいから、こんなきれいな桜を、見逃してしまふじゃないか」

「——なにもかも、変わっちゃうわけじゃないよ」

その言葉は、自然とぼくの口からこぼれ落ちた。ジーエムがはつとした様子でこちらを振り返った。なにかに ⁸ アヤツられるように、ぼくはさらに続けた、

「別々の中学に進学したら、これまでみたいに毎日会えなくなっちゃうし、放課後だつて部活とかでなかなかいっしょに遊べなくなるかもしれないけど……でも、ときどき会えたりしたら、ぼくは今と同じように、ジーエムと話したり遊んだりしたいと思うよ。変わらずに友だちでいたいと思うよ」

自分の気持ちを確かめるように、変わらずにあるようにと願うように、ぼくはゆつくりとそう言った。

ジーエムはしばし無言で固まっていた。しかし、やがてその口が動いて、ぼくの名前をよびかけた。

「渚くん——」

「当つたり前だ！」

突然背後で大声が響いた。一瞬心臓が止まったかと思つた。驚いて後ろを振り返ると、いつからそこにいたのか ¹⁵ ザツキーが腕組みして立っている。なぜかザツキーは上半身になにも着ていなかった。窓をくぐり抜けるときに引かかるかなにかして脱いだのかもしれない。そのせいで体の前が物置のほこりでどろどろだった。

ザツキーは言った、

「おまえら二人とも難しく考えすぎ。そんなの当たり前だろ。中学行つても高校行つても変わらない。おれたち三人の友情はッ、永久に不滅だ

ッ！」

⑨ ウチュウにも ¹⁰ トドクような大声で、ザツキーは叫んだ。上半身裸で友情とか永久とか叫んでいるザツキーの姿は、普段なら確実に笑えるはずなのに、そのときぼくは笑う代わりに ³ が熱くなった。ジーエムも笑つていなかった。またぼくらに背を向けていた。泣いているのかもしれない。

「そうだね。ぼくはただ、¹⁶ その言葉が聞きたかつただけなのかもしれないね」

そのうちぼつりと、ジーエムはそう言った。ひとり言だったのかもしれないけれど、ぼくにもたしかに聞こえた。

いつの間にか ⁴ を出した月の光が、屋上のぼくたちを照らしていた。(如月かずさ『サナギの見る夢』講談社より)

問 1 〃 アゝオの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問 2 〃 ①〃⑩のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問 3 〔A〕AゝDに次のアゝエをあてはめ、記号で答えなさい。(同じ記号は一度しか使えません。)

ア そつと イ はっきりと ウ ぎゅつと エ ちつとも

問 4 〃 1「それ」とは何のことですか。本文から五字でぬき出しなさい。

問 5 〃 IゝIIIの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアゝエから選び、記号で答えなさい。

I 「生返事」

ア まぬけな返事

ウ 気のない返事

II 「露骨に」

ア あからさまに

ウ さりげなく

III 「不覚」

ア がまんできないこと

ウ 覚えていないこと

問 6 〃 2「サナギの見る夢」はどのような夢ですか。解答らんに合うように二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問 7 〃 3「声だけでなく姿までもがもとに戻っていた」とありますが、なぜ「もとに戻って」しまったのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サナギの話が本当なのか疑問に思い、父さんと対等に話をしたくなったから。

イ サナギの話を聞いて、今の自分も全く同じだと言って父さんを安心させたかったから。

ウ サナギが大人になる準備をしていると知り、自分の成長を父さんに認めてほしかったから。

エ サナギの話を聞くことで、今の自分が抱えている思いを父さんに打ち明けたくなったから。

問 8 〃 4「それなら……」のあとに「ぼく」はどのような言葉を言いたかったのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サナギの方が人間より幸せでことになるんじゃないか！

イ サナギが友だちと本当につき合うことはないじゃないか！

ウ サナギのままで蝶になんかならなくていいじゃないか！

エ サナギはいつまでたっても蝶にならないじゃないか！

問 9 〃 5「責める気持ちも怒る気持ちも、どこかへ消えてなくなっってしまった」とありますが、そのような変化のきっかけとなったのはどういうことですか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問 10 〃 6「申し訳ないがそれはお断りしよう」とありますが、①「それ」とはどういうことを指していますか。十字以内で答えなさい。

② ジーエムはなぜ断ったのですか。十五字以上二十字以内で答えなさい。

問 11 〃 7「一番遠いところにいた」とありますが、普段のジーエムはどのような態度だったと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 活発 イ 冷静 ウ 素直 エ 幼稚

問 12 〃 8「ぼくに背を向けて」とありますが、この時のジーエムの思いとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のくだらない行動に「ぼく」が怒っていると思っておびえている。

イ 「ぼく」に本音を言われとまどいを感じているが、それを悟られたくない。

ウ 自分の格好が恥ずかしくなり、赤くなりそうなのをごまかしたい。

エ 「ぼく」の顔を見ながら本音を伝えるのは、恥ずかしいし照れくさい。

問 13 〃 9「父さんとのやり取りがよみがえってきた」とありますが、①そのきっかけになったものは何ですか。本文から十一字でぬき出しなさい。

② それは父さんとのやり取りの場面では何にあたりますか。本文から漢字一字でぬき出しなさい。

問 14 〃 10「父さん」とありますが、夢の中に現れる父さんは「ぼく」にとつてどのような存在ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もの静かで優しく、「ぼく」をよく理解して導いてくれる存在。

イ 常に陽気にふるまって、「ぼく」を楽しませてくれる存在。

ウ いつもおだやかに「ぼく」に接するが、間違えたことは厳しく指摘してくれる存在。

エ 静かに微笑みながら「ぼく」の話を聞き、不思議な力で願いをかなえてくれる存在。

問 15 〃 11「まだつぼみの菜の花の花壇」とありますが、ここで使われている表現技法として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 倒置法

イ 比喩

ウ 体言止め

エ 反復法

問 16 〃 12「なにもかもが、変わってしまうわけではないよ」とありますが、父さんが変わらないと考えているものについて説明している一文を―― 12より後の本文からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

ア 目頭

イ 耳

ウ 顔

エ 目

問 17 〃 12「なにもかもが、変わってしまうわけではないよ」とありますが、父さんが変わらないと考えているものについて説明している一文を―― 12より後の本文からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

問 18 〃 13「サナギから蝶」という変化は、今の「ぼく」としてはどうなることを意味していますか。解答らんに合うように十字以上十五字以内で答えなさい。

問 19 〃 14「最後に父さんの楽しげなささやき声が聞こえた」とありますが、最後に父さんが伝えたかったことはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の世界に閉じこもっていたら、持っている力まで失われてしまうということ。

イ 今抱えている悩みや苦しみは、いずれ自然と解決していくということ。

ウ 思い出はいつかは消えるのだから、未来に進むことをおそれはいけないということ。

エ これから進んでいく未知の世界にも、すばらしいものが待っているということ。

問 20 〃 15「ザッキーが腕組みして立っている」とありますが、この時のザッキーの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が信じていることを二人とも否定していて、そのばかばかしさにあきれている。

イ 自分にしてみれば当然のことを二人があれこれ理屈っぽく話し合っているのがじれったい。

ウ 自分は二人のことを信じていたのに、二人の方は自分をのけ者にしていたとわかって怒っている。

エ 自分が一番大切にしているものが二人にとっては大して価値のないものだったことがぐやしい。

問 21 〃 16「その言葉」にあたる言葉を本文から一文でぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

井

コ
キ
ユ
ウ

問
4

という夢。

問
9

②

②

4

問
17

۱۲۷۰

問
21

受験番号